不安、焦り眠れぬ夜

復興道半ば　2　癒えない傷

震災5年 岩手・大槌からの報告

被災ショックや仮設暮らしで疲れ切っている

津波の恐怖や避難所での苦労から、行政への不満、近所付き合いの愚痴。鍼灸治療中の話題は、果ては息子の嫁探しにも及んだ。

東日本大震災の被害が甚大な岩手県大槌町に、国際医療ボランティアAMDA（岡山市）が開設した「大槌健康サポートセンター」の施術スペースだ。体と心の癒やしを求める被災者たちが連日訪れる。

「被災のショックや長引く仮設住宅での暮らしでみんな疲れ切っている。治療と会話でちょっとでも楽になってもらえたら」とセンター長の鍼灸師、佐々木賀奈子さん(53)。

自身も被災者だった。当時運営していた町内の診療所で、強い揺れの後、ふと海の方に目をやると、空一面が灰色に染まっていた。土ぼこりを見たら高台に逃げろ―。祖父母の言葉が浮かび、道路へ飛び出した。

水に漬かっていたり、けがをしている人を助けたりしている最中、波にのまれ、意識を失った。気付いたのは、濁流の届かない道路の上へと誰かが腕を引っ張り上げてくれた時だった。

「センターを訪れる人とは津波の恐ろしさを知る者同士。何だか気持ちが通じ合うんです」

◇　◇

震災では多くの被災者が家族や家、その両方を失った。心の傷は深まることはあっても、なかなか癒えない。鍼灸患者の中には震災のトラウマ（心的外傷）で不眠になった人も少なくない。

被災者の60代男性。妻が津波にのまれた時、波の勢いで握った手を離してしまった。その瞬間の妻の顔が夢に出てくるようになり、眠れなくなった。

津波の体験を、自分もいまだに思い出すのだと佐々木さんから聞き、男性は泣いた。「胸のつかえが取れたのか、翌朝に『おかげでよく眠れた』と電話があった」という。

震災から5年の月日が流れ、被災者の苦しみは増していると、佐々木さんは思う。

住宅再建のめどが立たないし、仮設暮らしの終わりが見えない。震災直後、被災者は「生きているだけでよかった」と喜び合った。だが、今は心のどこかに不安や焦りを抱え、「生きているだけで地獄だ」とこぼす。

佐々木さんは言う。「被災者はいつしか互いに胸の内を明かさなくなっていた。ちょっとした言葉が刃物になるから」

◇　◇

「うれしいことがあっても大っぴらにできない。おかしいね」

2月初め、鍼灸治療に訪れた日笠睦子さん(58)。津波で家を流され、今も仮設暮らしだが、先日、住宅を建てるための土地の権利が抽選で当たった。

「朗報」を同じ仮設住宅の人には伝えていない。みんな仮設を出たくても出られない状況が続き、住宅をいつ再建できるのかと思い悩んでいるからだ。

「『よかったね』と言われても、きっと他の意味もある。『あんただけよかったね』って。私もそうだけど、人の気持ちって悲しい」と、日笠さんは視線を落とした。

佐々木さんは被災者のそんな心情に寄り添っていこうと決めている。

「被災者が人間らしく普通に生きる手伝いができれば」。その思いから、佐々木さんはAMDAの活動に加わっている＝2月2日、大槌健康サポートセンター